HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	遊牧英雄から民族英雄へ？：クルグズ首領シャブダンをめぐる歴史実践を中心に
Author(s)	秋山, 徹
Citation	日本中央アジア学会報, 17, 28-29
Issue Date	2021-07-31
DOI	10.14943/jacas.17.28
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89143
Type	article
File Information	JB017_005akiyama.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

遊牧英雄から民族英雄へ？
── クルグズ首領シャブダンをめぐる歴史実践を中心に ──

秋山　徹

シャブダン・ジャンタイ（ca.1839–1912）は、19世紀中期から20世紀初頭にかけて生きたクルグズ首領である。本報告は、中央ユーラシア近現代史上の大きな問題である、民族の創成と定着という状況のなかで、ロシア支配のコラボレーター（協力者）としてのバックグラウンドを有する彼の位置づけを、さまざまな歴史実践（系譜書、歴史書、伝記、戯曲、映画など）を手掛かりに考察した。

第1節「『民族のリーダー』としてのシャブダン像の萌芽」では、19世紀末から20世紀初頭にかけて、ロシアの征服活動および支配のコラボレーターとしての活動、メッカ巡礼（ハッジ）をはじめとする活発化するイスラーム実践などを背景に、シャブダンの超部族的な存在意義が確認された。本節後半では、20世紀初頭に執筆された、シャブダンを題材とする英雄叙事詩や歴史書、ならびにシャブダンの没後に実施された一周忌（アシ）で唄われた挽歌（コショク）において、部族を超えた「民族のリーダー」としてのシャブダン像が示されていたことを確認するとともに、むしろ彼の死後、そうした歴史実践を介して「民族のリーダー」としてのシャブダン像がむしろ普及していった可能性を指摘した。

第2節「シャブダンに向き合うソ連権力」は、「民族のリーダー」としてのシャブダン像にソ連権力がどのように向き合ったのか考察した。ソ連権力は、シャブダンが「［民族］独立の闘士（*borets za nezavis'most'*）ではなく、征服者（*zavoevatel'*）である」として、旧ツァーリ植民地体制の先兵である点を強調するとともに、1920年代後半には「反マナプ」プロパガンダキャンペーンを大々的に展開した。本節後半では、クルグズ知識人カスム・トゥヌスタノフによる戯曲「シャブダン」（1931年）を取り上げた。この戯曲に込められたトゥヌスタノフの思惑は、シャブダンを筆頭とする旧首領層を「学び捨てる」こと、すなわちロシア支配下における彼の役割や動向を明確に描き出すことで、それと決別することであった。しかし、他方で、シャブダンを取り巻くロシア帝政末期のクルグズ社会のよりリアルな描写ゆえに、第1節において確認された、20世紀初頭に顕在化するようになった、民族のリーダーとしてのシャブダン像を提示することによって、ソヴィエト当局側の強い警戒感を喚起することにもつながった。

第3節「ソ連期におけるシャブダンの子孫たちによる歴史実践」は、ソ連体制下におけるシャブダンの子孫たちによる歴史実践を検討した。まず、1947年に息子カマル・シャブダノフによって執筆された伝記『我らが父シャブダン・バートゥルの生涯』を取り上げ、その内容を検討した。その結果、特にフェルガナ征服作戦やアライ・クルグズの平定におけるシャブダンの関与をめぐる記述において、「虐殺への加担者」ではなく、「救済者」としてのイメージの強調が認められ、ひいてはクルグズ民族史におけるシャブダンの正当な評価につなげたいという意図が執筆動機としてあった可能性を指摘した。さらに、伝記の執筆に加えて、ソ連時代にシャブダンの子孫のもとではファミリー・アーカイヴ、すなわちシャブダンやその息子たちのもとに蓄積された文書、新聞切り抜き、写真などが大切に保管、継承されていた。1973年、カマルからアーカイヴを継承したその甥アブディルダベクによって、一族の系譜（サンジラ）が作成され、アーカイヴに新たに追加されていたことが明らかとなった。この系譜は公刊を前提としない、私的な領域での歴史実践であると言えるが、ソ連時代においても、シャブダンに連なる一族の歴史を再確認する営みが実施されていたことが明らかとなった。

最後に、ソ連邦解体後の現代クルグズスタンにおけるシャブダンの位置づけを、同国で製作された歴史映画を題材に検討した。『山嶺の女王クルマンジャン』（2014年）はナショナリズム、すなわち民族団結の鼓舞を目的とする国策映画であるが、映画中シャブダンはクルグズ民族のリーダーとして描かれる。だが、ロシアの軍服を身に纏い、民族団結を訴えるシャブダンからは、民族団結のリーダーとしての弱さとジレンマが漂う。2015年には国家主導で歴史映画『シャブダン』が計画されたものの製作は頓挫した。その背景には様々な要因があるとされるが、ロシアによる征服活動の一環としてシャブダンが一戦を交えた首領の子孫たちをはじめとして、シャブダンを民族のリーダーとみなすことに抵抗感を抱く人々は少なくない。このように、没後1世紀以上を経た現在においてもシャブダンは、クルグズスタンという現代国家がロシア支配の過去を今なお重く引きずっていることをまざまざと知らしめるのである。

（早稲田大学高等研究所）